



## パレルモ紀行

パスクワ（復活祭）が終わり、パレルモの街は新たな季節の訪れを告げる。4月のある日、祝日の余韻がまだ残るパレルモの街を訪れることになった。シチリアの中心地であるこの都市は、幾多の歴史と文化が深く根を下ろした場所。パレルモは、様々な民族が交錯してきた場所だ。ある人は「パレルモはフィレンツェを10集めた価値のある町」という。パレルモの魅力を少しでも感じ取れることを期待しながら、私は旅立った。

パレルモの空港から市内へ向かう道すがら、古い建物や教会が目飛び込んでくる。これらはまるで、時を超えて語りかけてくるようだ。市内を歩くと、春の陽射しが心地よく、パレルモの街角を風が撫でていく。街の喧騒が心地よいリズムを刻む。この旅の始まりは、まるで古い物語のページをめくるような期待感に満ちていた。

パレルモの歴史は、古代から続く多彩な文化の影響を受けている。フェニキア人、ロー

マ人、アラブ人、ノルマン人、スペイン人。彼らがこの地に残した足跡は、街のあらゆるところに見ることができる。

私はパレルモ大聖堂を訪れた。アラブ・ノルマン様式の建築物。街の中心に堂々とそびえ、まさにこの街の象徴である。壮麗な外観は、その歴史を物語る。大聖堂に足を踏み入れると、その広大な空間に圧倒される。高い天井から差し込む光が、内部の装飾を美しく照らし出す。内部は静寂に包まれて・・・はいない。自分が観光客であることを棚に上げ、しばし観光客で溢れかえった光景に閉口する。人ごみが苦手な私は、新鮮な空気を吸うべく大聖堂の屋根の上へ避難。さあ空中散歩を楽しむぞと意気込むも東の間、そこにも長蛇の列。そして、照りつける太陽。春の陽射しとはいえ、長時間浴びるとなかなか堪える。シチリアの太陽を見くびってはいけなかった。しばし暑さに耐える。その後、我慢は素晴らしい景色を堪能することで報われた。涼を求めて別の出入り口から再び内部へ。そ





こは歴代の王たちの眠る場所だ。あのフェデリコ(フリードリヒ)2世もここに。少しの間、かつてこの地を治めた人々の姿を想像した。

パレルモ大聖堂から徒歩20分ほど。ポルタヌオーバ(ヌオーバ門)を抜けて西に進むと、カプチン派のカタコンバがある。ここには、約2千体の骸骨とミイラが安置されており、異様な光景が広がっている。修道院の中には冷たい空気が漂う。私は静かに歩を進めた。ミイラは職業、性別、社会的地位に基づいて、別々の廊下に配置されている。静けさの中に潜む人々の物語を想像する。彼らは時を超えて、今もなおこの地に生き続けているかのようだ。特に幼女ロザリアのミイラは眠っているとしか思えないほどだ。ミイラたちの表情は、死後もなお何かを語りかけてくる。その静寂の中に、死と生の境界が曖昧になる瞬間が確かにあった。

モンレアーレ大聖堂へも足を運ぶ。パレルモから車で約30-40分、丘の上にそびえるこの聖堂は、その壮麗さで知られている。モンレアーレ大聖堂は、ノルマン王朝の栄華を象徴する存在であり、ここにもアラブの影響を受けた建築様式が見られる。大聖堂に足を踏み入れる。天井を見上げると、キリスト教の物語が金色のモザイク画で描かれており、そ



の精緻な技術に驚かされる。聖なる空間に包まれ、私はその美しさに心を奪われた。ここに込められた信仰と歴史を感じながら、しばし時を忘れた。大聖堂の外に出る。モンレアーレの丘から望む景色は、まるで絵画のようだ。緑豊かな大地と青い空がどこまでも広がる。帰り道、モンレアーレのバールで一息つくことにした。地元のビールとジェラートを頼むと、店員が手際よく準備してくれる。冷たいビールが渴ききった喉を潤す。生き返る。ジェラートは濃厚でクリーミー。口の中で溶けるその甘さを感じる。まさに至福のひとつときだ。疲れが一瞬で吹き飛ぶ。周囲の人々の笑い声や会話が心を和ませる。そして、パレルモにいることを実感する。こうした瞬間が、旅の醍醐味でもあり、思い出に残るひとときとなった。

### 著者紹介



宮垣 丈晴  
(みやがき たけはる)

日本弁理士、欧州特許弁理士。  
2015年に新樹グローバル・アイピーに入所。2016年よりボローニャ在住。  
2004年に知財分野のキャリアをスタート。機械、電気電子、ソフトウェア分野の特許出願及び中間処理、クリアランス調査、無効資料調査、鑑定等を担当。

立命館大学大学院修了。専門はロボット工学。

[unitedgips.com](http://unitedgips.com)

